

東京都荒川区は区内のすべての中学校に「防災部」をつくり、ジュニア防災リーダーの養成に取り組んでいる。この中で生徒たちにジュニア防災検定を受検させている。毎日新聞（平成27年10月6日付）に生徒たちの活動が紹介された。

荒川区全中学に設置 つながる「防災部」と高齢者



地域の高齢者宅に学校便りを届け、談笑する南千住二中レスキュー部の生徒たち＝荒川区で

荒川区の区立中学校全10校で今年度、部活動の「防災部」が設置され活動を始めた。きっかけとなったのは、東日本大震災後の2012年5月、いち早く設立された区立南千住第二中（斉藤進校長、生徒310人）の「レスキュー部」だ。災害時に地域の高齢者をスムーズに避難所へ誘導し、支援できるよう日々、ろから顔見知りになる「絆ネットワーク活動」などに取り組む。地域に広がる中学生たちの防災活動の現場を訪ねた。

【川畑さおり】

「新しい学校便りができたので、ぜひ見てください」。南千住二中の生徒が9月24日、2〜3人でチームを作り、学校近くの高齢者宅を訪れた。学校便りを受け取った河辺幸子さん（81）は「若い方とお話をするのはいいですね。いざとなった時に頼もしい存在です」とほほ笑んだ。レスキュー部はテニスなどの他の部活動との掛け持ちが多く、当初は65人

であったが、今年度は19人と全校生徒の3分の2が所属する。「防災に強い地域は人づくりから」と斉藤校長。松田公好副校長は「地域を大事にすることで心も育つ。地域に貢献したいという気持ちが生徒たちに育ってきた」と手こえを話す。

8月には、学校の体育館が避難所になったとの想定で防災訓練をし、発電機や簡易トイレの組み立て、炊き出しなどを体験。作った食事を地域の高齢者に食べてもらい、避難所を見学してもらった。

絆ネットワーク活動では、生徒たちが登録している60〜80代の32世帯を月1〜2回訪問し、お年寄りの安全確認にも役立っている。近くの保育園との合同避難訓練や救命講習の受講、地域行事の手伝いなど活動は多彩だ。斉藤校長は「いろいろな活動に参加することで、災害時に地域に目が向くようになる」という。部員の河辺芽生さん（3年）は「お年寄りが避難する手助けができればいいな」と1年の時に入部。「この家には足の悪い人が住んでいるとか、地域のことかわかってきた。自分たちが地域をもっと知るための部活動だ」と思う。宮田楓恋さん（同）は「顔見知りの人を増やして、何かあった時にいろんな人と助けあえたらいい」と話す。

同校では、高度な救命技術を持つ生徒を育成しようとして、今年6月に新たに「スパーレスキュー部」も発足。現在約20人が所属しているという。荒川区全体の活動も活発だ。夏休みには各校の代表20人が東日本大震災で被災した宮城県南三陸町や岩手県陸前高田市を訪問するなど、現在計308人が活動中だ。